

直接圧迫止血法

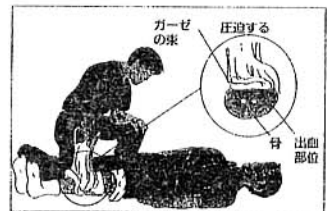
出血部位を圧迫し、止血帯を巻く

- きれいなガーゼやハンカチなどを傷口に当て、手で圧迫する。
- 大きな血管からの出血の場合で片手で圧迫しても止血しないときは、両手で体重を乗せながら圧迫止血をする。



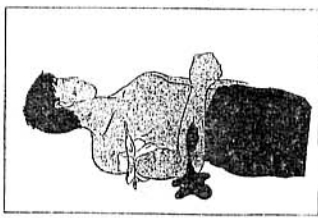
ポイント

- 止血の手当を行うときは、感染防止のため血液に直接触れないように注意する。
- ビニール・ゴム手袋の利用。それらがなければ、ビニールの買い物袋などを利用する方法もある

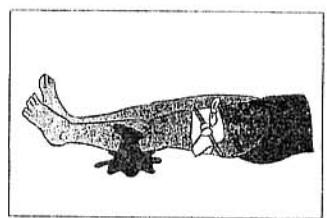


止血帯法

止血帯で止血できる部位(手足の太い血管損傷による出血で、直接圧迫止血法では止血が困難な場合に行う)



腕の場合



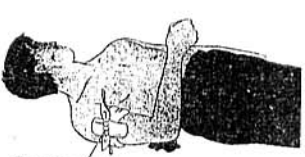
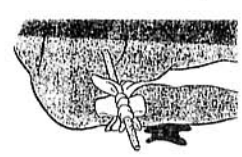
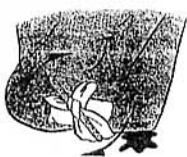
足の場合

止血帯法の手順



②止血帯をゆるめに結び、当て布を置く。

③棒を入れ、手で当て布を押さえる。



ポイント

- 止血帯は、できるだけ幅の広いもの(3cm以上)を用いる。
- 棒などで固定したときは、止血時間を記録し、もし30分以上続ける場合には、30分に1回止血帯をゆるめ、血液の再開を図る。そして、出血が続いていれば、再び緊縛(固定)を実施する。

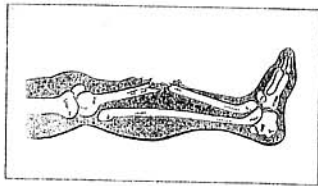
骨折に対する応急手当

1. 骨折の部位を確認する

- どこが痛いか聞く。
- 痛がっているところを確認する。
- 出血がないか見る。

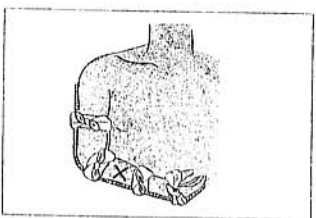
ポイント

- 確認する場合は、痛がっているところを動かしてはならない。
- 骨折の症状
 - 激しい痛みや腫れがあり、動かすことができない。(変形が認められる。骨が飛び出している。)
- 骨折の疑いがあるときは、骨折しているものとして、手当をする。

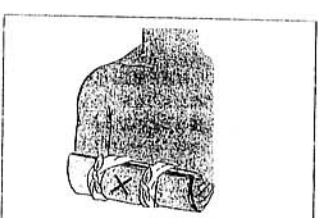


2. 骨折している部位を固定する

- 協力者がいれば、骨折しているところを支えてもらう。
- 傷病者が支えることができれば、自ら支えてもらう。
- 副子を当てる。
- 骨折部を三角巾などで固定する。



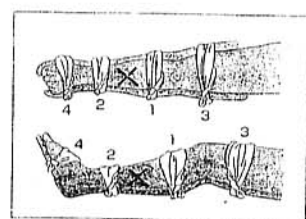
腕の固定



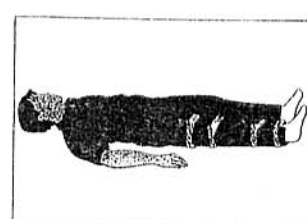
雑誌を利用した前腕部の固定



★三角巾などで腕をつる



足の固定

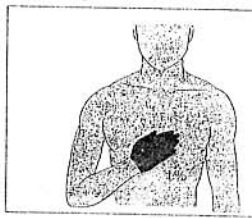


ダンボール棒を使用した下肢の固定

熱傷(やけど)に対する応急手当

1. 熱傷の程度を確認する

- 熱傷の程度は、熱傷の深さ(皮膚の状態)と熱傷の広さから判断する。
- 熱傷の深さ(皮膚の状態など)を調べる。
 - 赤いか(Ⅰ度)
 - 水疱か、水疱が破れた状態か?(Ⅱ度)
 - 白っぽいか?(Ⅲ度)
- 熱傷の広さを調べる。
 - 簡単な方法として、手掌法がある。傷病者の片手の手のひらの面積が体表面積の1%と考えると、熱傷の面積を調べるものである。



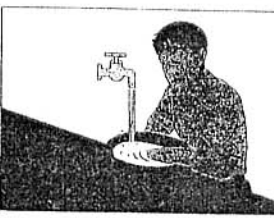
手掌法

2. 比較的軽微な熱傷の場合

- できるだけ早く、きれいな冷水で15分以上痛みがなくなるまで冷やす。
- 十分冷やしてからきれいなガーゼを当て、三角巾や包帯などをする。

ポイント

- 靴下など衣類を着ている場合は、衣類ごと冷やす。
- Ⅰ度で広い範囲の熱傷の場合は、冷やすときに体が冷えすぎないように注意する。
- 水疱を破らないように注意する。
- 薬品を塗ってはならない。



3. 重症な熱傷の場合

- 広い範囲の熱傷の場合は、きれいなシート等で体を包む。
- Ⅲ度の狭い範囲の熱傷の場合は、きれいなガーゼやタオル等で被覆する。

ポイント

- 重症の熱傷のときは、冷やすことに時間を費やさずに、できるだけ早く専門医の処置を受ける必要がある。



4. 衣服や靴などを早く取り除く

- 衣服や靴などを早く取り除く。
- 体についた薬品を水道水等で20分以上洗い流す。
- 目に入った場合は、水道水等で20分以上洗い流す。
- 熱傷したところを、きれいなガーゼやタオル等で被覆する。

ポイント

- 薬品を洗い流す場合は、ブラン等でこすってはならない。
- 化学薬品に限らず目の熱傷の場合は、絶対に目をこすってはならない。

